

西田幾多郎と九鬼周造は、互いに身近な場所で仕事をし、つねに敬意と友情をもって触れ合いながらも、思想的にはとくに表立って交わることなく、あたかも知音がただ目礼だけを交わしてすれ違うように相次いで没した。本提題では、この二人の思想家を、「永遠の今」というテーマに沿って、その時間論に注目しつつ比較してみたい（なお、当日は両者のいわば「つなぎ」としてハイデガーの思想に触れる予定だが、以下の要旨においては、簡潔さを旨として、その点に関する叙述は割愛する）。

よく知られているように、西田はその「永遠の今」というアイデアを、アウグスティヌスの有名な「過去の現在、現在の現在、未来の現在」という時間論から着想した。ここに、過去・現在・未来という三つの時間様相に通じる共通の現在が「永遠の今」としてクローズアップされてくる。アウグスティヌスの議論は九鬼も好んで引くところであり、過去から現在を経て未来に至る連続的な時の流れを包むこの現在を、九鬼が言うところの、「水平的なエクスタシス」に対する「垂直的なエクスタシス」の方向に位置するものと解することは、たしかに可能であるように思われる。

とはいえ、西田は決して、上のアウグスティヌスの議論を全面的に受け入れるわけではない。というのも、西田によれば、そのように時間の全体が同一の現在に包まれるだけなら、時間そのものがくり返しうるものになってしまうからである。西田は、そのように過去と未来が滞留する現在の底に、永遠の今が絶対の無として、自らをそのつどの現在として自覚的に掴みながらも、その掴まれた現在を絶えず消していくありようを見た。この時のありようが対象の側から私たちを圧迫するとき、時は決してくり返すことのできない絶対の流れ（絶対時）として現れる。それは、私たちがそのうちでひとえに老い、かつ死んでいく時として、私たちにとってある意味、最も基礎的な、かつ切実な時の姿である。

以上のように考える西田にとって、垂直的なエクスタシスの方向に「回帰的時間」を考える九鬼の議論は、どのように映るだろうか。いくらか頭ごなしに言えば、西田にとって「円を描く時間」とは、過去と未来が現在に滞留して、ある意味、時間がくり返しうるものになることを、たんに対象的にイメージしただけの不合理的な表象、というふうに解されざるをえないように思われる。この点をめぐり、本提題では、以下の二つの仮説を提示したい。すなわち、九鬼の「回帰的時間」論は、第一に、詩の押韻やリズムと同じく、それ自体が経験のある特定の質の、芸術化の産物であること。第二に、そのような（つまり芸術化という）動機を棚上げにするなら、九鬼が見ていた事柄は、究極的には、西田が見ようとしていた事柄に回収されるであろうこと——この二つである。